年々歳々

石井武俊

著者紹介

大正八年、東京都生まれ
昭和十六年、東京大学法学部卒
昭和十七年、鉄道省就職
昭和二十六年、病気のため退職
昭和二十七年、再就職（以来、門司鉄道管理局、西部支社主計課長、広島鉄道管理局経理部長、大宮工場次長、関東支社調査役、鉄道技術研究所総務部長兼調査役、監察局監察役を経て、現在、関東鉄道学園学園長）
現住所、東京都新宿区戸塚町三―三二〇
電話　〇三・三六八―七四一一

年々歳々
定価　五〇〇円

昭和四十六年六月十五日　印刷
昭和四十六年六月二十日　発行

著者　石井武俊
発行者　市川潔

発行所・編集企画研究センター
東京都千代田区神田小川町三―一四
万水ビル五階　電話〇三・二九三―八五八八

印刷所・竹内美術印刷株式会社
東京都渋谷区幡ヶ谷二―二二―一

年々歳々

石井武俊

編集企画研究センター

目次

古寺を訪れる楽しみ……七
秋篠寺……一二
桂と修学院……一六
赤人の墓を訪ねて……二三
アフリカにいる日本人総裁……二七
思い上がり……三〇
ある友人……三五
ビクトリア女王の貨幣と地球儀……三八
フレンチ・クォーターを訪れて……四一
もう一人の〝家族〟……四五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

私の青春時代……四八
病気の効用……五三
ロ　ベ　タ……五五
万博のぞき見……五八
年々歳々の花……六一
少年老い易く……六六
試　　験……七〇
ユーアティテュード……七三
外国語一年生……七六
痴犬クリス……八〇
言葉と心……八五
甘えという名の病……八八
読書の楽しみ……九二

ソフトボール……九五
スポーツのすすめ……一〇〇
幸福の周辺……一〇五
ある転機……一一〇
別天地の意味……一一四
打ち込む……一一七
白い作業衣……一二三
初春を迎えて……一二七
春を待つ心……一三一
生活の知恵……一三四
経営合理化と名古屋鉄道……（生産性運動の展開）……一三九
勇気ある生き方……一四八
学園におけるグループ活動……（学園管理の一つの試み）……一六〇

教育評議員会会長あいさつ……一七〇
新たな教育活動の展開　……（人間尊重の思想に基づく教育をめざして）……一七八
国鉄における目標管理体制の導入展開……二〇一
あとがき……二三四

（装釘）　内　田　克　巳

古寺を訪れる楽しみ

奈良は心の恋人

私は古い寺を訪ねて歩くことが好きである。今までに各所の寺を見て回った。しかし、何といっても、最も強く心をひかれるのは奈良の古寺である。私は精神的に疲れてくると、むしょうに奈良にいきたくなる。そして、電車が奈良に近づいて、窓から小高い丘（古墳）が次々に見えてくると、恋人の家に近づいたような喜びと緊張感をいだく。なかばくずれかけた白壁の築地の続く道をゆっくりと歩くときや、春の田圃路をたどりながら菜の花畠の向こうに黒ずんだ五重塔が見えてきたときなど、奈良にきた喜びがこみ上げてくる。また、晩秋の晴れた日に、大和地方特有の小粒の柿が真赤に熟れて、梢に二つ三つ陽に照り映えているのを見ながら、古寺から古寺への道をたどるのも楽しい。岩船寺にいく途中の風雨にさらされて路傍にひっそりとたたずむ石仏

の姿は、素朴で美しい野の仏に対する目を開いてくれる。こうした喜びは奈良の古寺を足で歩いて訪ねる者だけが知る喜びであろう。

仏像のもつ重み

私は観光バスのはいる寺や京都の名刹といわれる大寺院はあまり好まない。これらの寺は人が多すぎて、ゆっくり拝観できないし、また大寺院はいかにも宗教の力の大きさを誇示しているようで、心がなごまないからである。これにひきかえ、人影もまばらな古寺を訪ねて、ゆらぐ燈明のほかげを通し千年の重みに堪えながら、ひっそりと立つ仏像を拝するとき、歳月の隔たりを超えて、天平の昔の信仰と感動、そしてその時代の社会生活の鼓動までをも追体験できるように思われる。一〇年以上も前に、初めて中宮寺の弥勒菩薩や秋篠寺の伎芸天、興福寺の阿修羅等のすぐれた仏像を見て、それらのみ仏の上に汚れを知らぬ飛鳥乙女や豊麗典雅な天平時代の貴婦人、あるいは奈良朝廷に仕える清冽な采女の姿を思い浮かべて、うつし身の女性の美しさを写して、それを信仰にまで高めた先人の才能と、その信仰のあつさに感動したときのことを、きのうのように思い出す。

これらの寺も最近は観光ブームで、拝観者が多くなり仏像が信仰の対象としてではなく、単な

る観光資源として扱われていることは悲しい。しかも十分な保存の手が打たれていない。もちろん、劣悪な条件下に放置して貴重な民族の遺産を朽ちさせることは許されないが、どんなに保存条件がよくなっても、仏像は博物館や宝蔵庫のガラスのケースに納まっては、その精神的意義を失って単なる古美術にすぎなくなってしまう。昔の風情を残しながら、保存条件のよい環境をつくり出す大いなる信仰と政治の出現が望まれるのである。

古寺巡礼の魅力

仏像は、その制作の時代によって、様式に変遷があり、表情も違う。そこに、その時代時代の信仰心の盛衰や政治、社会、文化等の変遷を感じとることができる。これが私の古寺巡礼にひかれる理由である。このような見方をするのには時間がかかる。だから、仏像を心ゆくまで観賞し、古寺のふん囲気にひたるには、ひとりでいくに限る。いわばひとりを楽しむのである。日ごろ、職場で心を煩わすことが多いだけに、このひとときが何ものにもかえがたく貴重に思われるが、同時に、いささか孤独の寂しさも感ずる。こうしたときに、ゆきずりの人から好意を受けることは本当にうれしい。

数年前、夕暮れ近く、疲れた足をひきずって、奈良郊外の不退寺を訪れたとき、やさしいねぎ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

らいの言葉と一緒にいただいた一服のお茶の味や、文殊院を尋ねあぐねて、道をきいたときに仕事をやめ、わざわざ私をモーターバイクに乗せて、二キロも離れた寺まで送ってくれた青年の親切に対する感謝の気持と、やはり人の世は暖かいものだというほのぼのとした感情とは、日ごろ活気はあるが、うるおいの少ない東京の生活を送っている私に、久しくみ失っていたものをみつけ出したような感動を与えたのである。

秋篠寺

近鉄奈良線の西大寺駅を降りて、北に一キロあまりいくと、競輪場の近くに、民家に囲まれて、つつましやかに秋篠寺がある。私が訪れたときは晩秋の午後であったが、黄色の土塀が暖かな日ざしを浴びて、ひっそりと立っていた。

この寺は奈良時代の末期に開基した寺で、いわば南部諸大寺の末っ子ともいうべき宿命を負った寺であるだけに、末っ子のもつ哀愁と人の良さが、そのままに当てはまる独特の雰囲気をもつといわれているが、その通りであった。奈良市内の諸大寺のような、これ見よがしの押しつけがましさがなく、ゆったりとしている。ここには観光バスもはいらず、訪れる人の少ないのが古寺を訪ねる者にはうれしい

南門をはいって木立の中の細い道をたどると、右に金堂があり、正面に小さなお堂がある。その奥に案内所があり、御用の方は三つ叩いて下さい――と書いた貼り紙のわきに鐘と木槌が吊し

てあるのが、いかにもこの寺らしい。拝観料を納めて金堂に戻ると、先客があって入口があいていた。本堂は国宝に指定されている。唐招提寺の金堂のように圧倒的ではないが、さすがに天平の品格を伝えている。

堂内は薄暗く、土間に敷きつめた敷瓦がひんやりとしている。内陣には十数体の仏像が安置されており、左隅に佇立する、おんたけ二メートル余の仏像が技芸天である。

何と豊麗典雅なみ仏であろう。このみ仏を拝観するために、はるばる奈良にきたのだが、技芸天はやはり期待を裏切らなかった。左斜め前方に向けて軽く俯せた慈愛溢れる豊満な顔の丸みは流れて、肩から胸にかけての豊かな隆起となり、更に大きくうねって腹部の丸みとなるが、それは、一度ひきしまってから、たくましいばかりに豊かな腰の張りとなって、ゆったりとした裳の中に消えている。

み仏は腰を軽くひねって、右腰に重心をかけて立ち、左手は大地を指し右手はゆるやかに曲げて、その指先は上方を指している。軽く広げた十本の指はまさに開こうとする花弁のように、それぞれ微妙な陰翳をもって変化し、み前に額づく者に何事かを語りかけているようである。ふくよかさと、いつくしみに溢れるお顔は、健康で聡明な天平の上流夫人の香気を心にくいまでに写し出している。涼しく流した目もとにえもいえないつやがある。それはただのあだっぽさではな

く、深い憂いと、しみじみとした愛情が籠められている。身も心も成熟しきって、安らぎの境地にある美しい中年の女性がちらりと見せるあの表情である。これを艶(えん)というのであろう。

あらわな上半身には肩から二の腕にかけてと、肩から斜めにゆるやかに腹部とをおおう条帛によって、裸身より更にゆたかに肉体の美しさを表現している。中年女性の自由濶達な姿態をあますところなく写して、少しも官能に流れず、うつし身の女性の美を超えた理想の美と、無限の慈悲を顕現したみ仏を彫んだ仏師の深い信仰と、才能とには畏敬の念をいだいた。このみ仏は頭部が天平末期の乾漆像で、胴体部は鎌倉時代の補作にかかる木彫であるが、いささかも一体感を損っていないのは稀有のことで、胴体部が運慶作と伝えられるのもむべなるかなと思われる。

私は技芸天の艶なる威厳に打たれて、低徊去る能わず前後左右から拝した。前から見てはすぐれた仏像も、後ろからみると存外つまらないのもあるが、このみ仏は後ろから見ても美しかった。厚みのある背、豊かな、いしきの広がりは中年女性の揺がぬ人生経験を表わすように、どっしりとたくましかった。長く見入っているので、住職が「仏様のやや左側からみるのが一番美しいですよ」といって、オペラ・グラスと懐中電燈とを貸してくれた。ゆらぐ灯明の焔を通して、懐中電燈で照らして見ると、肉眼では見分けられなかった微妙な表情がわかり、まことに美しかったが、一瞬その表情に恥らいの翳が走ったような気がして、仏に対する冒瀆行為のように思われた。

技芸天のお顔には剝落の跡が見られるが、年間を通じての温度や湿度に変化の大きい堂内に、今のような状態で放置してよいのであろうか。この寺にはあまり好奇の目で見にくる人はいないであろうが、堂の隅には古瓦が積み重ねられていて、何となく荒れた感じを受け、貴婦人の零落の姿を見るようなやるせなさを感じた。ここに限ったことではないが、最近、つくづくと仏像が見せ物に堕してよいのだろうかと思う。観光ブームになれて、寺も参詣人も仏像を彫刻としてのみ扱い民族の偉大な遺産をきわめて不十分な保存状態に放置して平気でいる。それどころか、法隆寺の仁王が、チューインガムの噛みかすをぶつけられ、戒壇院の広目天の佩刀が盗まれたように、貴重な文化財の破壊がしばしば行なわれている。

私は今、小学三年の娘に天平のみ仏の美しさ、おおらかさを知らしてやりたいと思うが、彼女が仏像の美を理解できるようになるまで果たしてみ仏が今の姿で保存されているであろうか。私たちが古寺にひかれるのは、やがては、歴史の中へ過ぎ去ってゆくもののもつ哀しさ、美しさへの郷愁であるかもしれない。それだからといって、民族の宝をむざむざ荒廃させることは後代に対する罪悪である。技芸天は、この本堂の片隅にひっそりと千年の塵をかぶって立つお姿を、燈明のゆらぎを通して仰ぐのが最も風情があるのかもしれない。しかし、近代建築の完備した保存条件の下で、現在と同じ風情を再現することができないものであろうか。国民に、そして政府に

その気さえあれば、貴重な文化財の保護はできるはずである。

昨年、数年ぶりに秋篠寺を訪れた。最近はテレビでも紹介されたし、観光バスもはいるようになり寺の財政が豊かになったのであろう、金堂の中が綺麗に整理されていた。外陣に置かれた二脚のベンチに、足を組んで坐った若い男女二人が腕組みをして、仏像を観賞していた。私は、久し振りにお目にかかり、み仏が、小さくなったような気がして、おやと思った。それは、技芸天が仏の座を降りて、単なる古美術品になったと感じたからであろうか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c